

ワンポイント・ブックレビュー

ロナルド・ドーア著、石塚雅彦訳

『働くということ - グローバル化と労働の新しい意味 - 』岩波新書（2005年）

著者の「半世紀にわたる社会学者としての一種の回想・総括」である本書では、三つの問いが立てられている。第一は、「働くということ」の意味 なぜ人間はそんなに働くのか、何が労働の動機付けとなっているのか、人は労働からどのような満足を得るのか。第二には、労働市場の柔軟性とそれがもたらす結果 不平等の拡大。そして、第三に、労働の性質、意味、報酬をめぐる規範、あるいは公正さの問題。

21世紀初頭の現在、われわれが生きているのは、あらゆる面でグローバル化が進行しつつある世界である。著者の関心の多くは、グローバル化の中で生じてきた様々な変化とその行方に向けられている。著者は、そうした変化を工業化・産業化がはじまって以降の長い歴史的趨勢の中に位置づけることも忘れない。最近の格差拡大あるいは二極分化傾向は、「身分から契約へ」「ゲマインシャフト（共同社会）からゲゼルシャフト（利益社会）へ」という近代化の（一方向的）プロセスの延長・加速に過ぎないのか、あるいは、逆転可能な政治的選択の結果なのか、と。

75年前のケインズの予言 20世紀終わりには労働時間は週5時間になっているだろう が外れたのは、第一には「働くこと」の意味が変化したからである。技術的進歩による生産性の大幅な上昇の果実は、労働時間短縮よりも消費増大により多く振り向けられた。より多く消費する楽しみのための労働、というわけである。競争心 隣の人に負けない生活程度を維持するための労働 という側面も大きい。

競争激化をもたらしたグローバル化について、著者はアメリカの文化的覇権、という側面を重視しているように見える。20世紀後半の趨勢だった福祉国家に象徴される平等と連帯重視の思想が、新古典派経済学と新自由主義に圧倒されつつあるのが現在だと著者はみている。各国のエリート層は「趣味においてはコスモポリタン、意見においてはアングロ・アメリカン」である「コスモクラット」で占められるようになってきている、というのだ。

事実としての不平等および格差拡大の傾向と、それを当たり前のこととして容認する意識の広がり、
「何が公正か」についての考え方に変化をもたらしつつある。この公正概念の変化を、工業化社会につきものの内的構造変化の結果というより、「文化的覇権国家アメリカへの文化的収斂」としてのグローバル化という外的影響に重点をおいて、著者は見ている。そこに、不平等・格差拡大とその容認という傾向の逆転、さらには資本主義の多様性に望みをかける著者の思いが表明されているといえるだろう。（Y・R・）

お詫び

『労働調査』2005年5月号のブックレビューの書籍名『子育て支援の論点』は、『子育て支援策の論点』の誤りでした。関係する方々にご迷惑をおかけしたことを深くお詫びいたします。